
バカな科学を世界のために inクリスマス

紅月 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカな科学を世界のために inkクリスマス

【Nコード】

N6504Z

【作者名】

紅月 空

【あらすじ】

クリスマス・イブのパーティーが行われないことを知った白河は、どうにかして水鳥とクリスマス・イブを過ごそうとする。

一方水鳥は新たな研究物の実験を行おうとしていた。

シリーズ短編第2話、皆様の応援のおかげで出すことが出来ました。

本当にありがとうございました！

(前書き)

この小説は、「バカな科学を世界のために」の続編です。
先にそちらを読まれてからのほうが内容を理解しやすいと思います。

またこの話はフィクションです。実在する個人、団体、地名はまったくのオリジナルであり、似ていたとしてもそれは偶然です。そのことを割り切ってお読みください。

恋人が愛を囁きあう「クリスマス・イブ」なんて言えば聞こえはいいが、実際そんな恋人がいない人たちもまたいるのだろう。

水鳥達も、それは同じだった……。

「今年もクリスマスパーティーするの？」

水鳥は研究室の自席で、カフェオレを飲みながらなにげなくそういった。

部屋は、彼お手製の暖炉（ただの暖炉ではなく電気で動く暖炉で、白河いわくの電気ストーブ）の熱気がこもっており、窓には水滴がゆっくりとしたり落ちていた。

「別に私はどっちでもいいわよ」

白河はワープロで書類をまとめながら、そう答えた。

本当は一番パーティーが好きな白河だが、子供っぽいかな、と思わずとそっけない返事をする。

「あ、僕は用事があるんで無理ですね」

前田はテレビゲームをしていた手を止め（仕事はまだ終わっていない）そう告げた。

「ああ、そうか。そういえば前田君、彼女ができたのだったな」

「はい……」

恥ずかしそうにうつむき、水鳥の呟きに肯定する前田。

そう、彼は半年前に高校時代の同級生とつきあいはじめていたのだった。

ちなみに彼女はショートヘアの活発な性格の笑顔がすてきな人（前田談）らしい。

「このリア充め」。

……しかしそうなるとパーティーは無理そうだな。2人だし」

その一言で白河がフリーズした。

「そうなりますね……。すみません」

「まったくだよ、困った助手だ。」

しかし、クリスマスが暇になるな……」

ああ、このままじゃパーティーがなくなっちゃう……。

白河は心のなかでそう叫ぶが、言葉にすることはできない。

「まあちようど仕事もたまった頃だし問題はないか。」

少し私は庭にでて実験をしてくるよ」

水鳥はそういうと、機械のリモコンをもって庭に出て行った。

研究所の庭、といっても車が4台ギリギリとまることができる、

といったほどの大きさのものが、水鳥の研究にはその大きさで十分らしい。

「僕もそろそろ失礼しますかね」

水鳥がでていくと、前田君も席をたった。

書類を持って行くところを見ると、大学へレポートの提出に行くのだろう。

彼はこうみえても大学の3回生なのだ。

誰もいなくなった部屋で、彼女は考えた。

なんとかしないと……。

「ミツちゃん、あのさ……。

明日、買い物に付き合ってくれない……かな？」

12月23日、クリスマス・イブ前日、白河は思いきってそつ告
白した。

言った、ではない。告白した、である。それぐらい、白河はドキドキしていた。

「ん？ 明日か。別に問題ないぞ」

水鳥は仕事の手をとめ、あっさりと答えた。

「え？ ホント？」

……分かった。じゃあ明日の昼からね。絶対だよ？」

白河はそういうと、平静を保ちながら部屋を出た。

廊下にでると、部屋との温度差にビックリさせられる。

白河の顔が火照っているだけなのだが、彼女はそれに気づくこともなくウキウキと廊下を歩いていった。

一方、水鳥は仕事の手を休め、彼の机の引き出しにいれてあるラッティングされた箱を取り出した。

ちようどいい、明日渡すとするか……。

ラッティングされたそれを、また机の引き出しにしまうと、水鳥は仕事を再開した。

「買い物っていつ買ったけど、一体どうすればいいんだろう……」
勢いで言ってしまう、内容を考えていなかった白河は、研究所内の仮眠室で横になりながら呟いた。

暗い部屋だが、完全防音仕様の壁は彼女の呟きを外へ漏らしはしない。

「こづいづい買い物ってなに買っただろう……」

職業柄、あまり買い物にいかず研究の手伝いをしている室内暮らしの白河には、世間一般の“デート”という風習に疎い。

「フラスコとか薬品とか買うのかな……。いや、ないないない。

服とか？」

一人自問自答する彼女だが、デートの知識が皆無に等しい分、答えなど出るはずがない。

「どっすりゃいいのよ……」

枕に顔をうずめた彼女の呟きは、また防音仕様の壁に吸い込まれていった。

「はっ！ そうだ！ 明日はクリスマススイブ！ ってことはケーキとかプレゼントとかそういうのを買えばいいんじゃないの!？」

絶対そうだ！、と一人納得し、彼女は仰向けに寝返りをうってそのまま深い眠りに落ちる。

だが、プレゼントの内容までは考えていないところが、彼女の爪の甘いところだった。

クリスマススイブは、晴天だった。

空は晴れ渡り、白い雲がちらほらと浮かんでいる。

昼間であるというのに街にはたくさんのお男お女がペアでデート（水鳥いわく徘徊）を楽しんでおり、水鳥と白河がその人混みにまぎれこんでも違和感はないだろう、と言っ具合だった。

しかし水鳥が白衣でなければ、の話だが。

「……屋外でも「博士」ってよんでもらいたの？
博士？」

「いや私にそんな趣味など断じてないぞ白河くん何故カムオンゴーストさんを取り出すまでもったのかそれ!？」

周りの目は2人に釘付けだが、白河はそんなことにも気づかずに水鳥をジト目で睨み続ける。

「まさか研究所の外でも白衣を着るとは思わなかったわ……」

「これには深い、わけではないにしろ理由があるんだよ!」

「どんなですか?」

うっ、と言葉につまる水鳥。

まさかこんな街中にいくななんて思ってたなんていえない

よなあ……。

そう、白衣の理由はソレだった。

「じ、じつは服のレパートリーが少なくてな……。

それに私イコール白衣だろう？ 八八八」

とつさに思いついた言い訳は、『葬式に喪服がなかったから私服できませんでした』レベルの言い訳だが、白河は理由以前の問題があった。「笑ってる場合か。ものすごい目立つわよ、それ」

そう、目立つのである。

晴天とはいえ、もう師走しわすである。街ゆく人々はセーターや防寒着を着ているのに対し、水鳥は「白衣」という（一応したにセーターは着ているが）ものすごい場違い雰囲気をかもしだしている。

白河は、やれやれ、と呟くと、水鳥の袖を引っ張った。

「まずミツちゃんの服を買わないとね……」

2人が立ち寄ったのは、低価格でおしゃれな服装がウリの店だった。

「おいおい、服なんて最低限似合ってたらいいだろっ?」

「ダメ。最低限、じゃなくてカッコイイくらいに似合ってたなきゃ駄目よ」

水鳥にはその感覚が分からない。服なんて温度や怪我から身を守る役割があればいいのではないか。

一年中白衣を着ているような水鳥には、ことさらにその感覚が分からなかった。

白河も偉そうなことをいってはいるがファッションに疎いのは同じなので、店員のおすすめの服装を購入し、水鳥は早速それをきた。「ほお、最近の服装はこんなにも暖かいのか。白衣が一番だという考えも改めねばならんようだな」

「そもそも白衣って外衣だけだね」

適当にツッコミをいれ、白河は腕時計を見る。

「2時半だって。どうする？ ミツちゃんにか買う物ある？」

「買う物って……。そもそも君が買いたい物に行きたいっていったのだらう？」

「まあそうなんだけどさ……」

よし！ 今しかない！

白河は決意した。

「じゃあついてきてくれる？ 一緒に、さ」

満面の笑みを浮かべた彼女の前で、水鳥は頭にハテナマークを浮かべた。

「マスター、カフェオレってあります？」

んう……、とカウンターで寝言をたてる白河の横で、水鳥は静かにそう呟いた。

「もちろんですよ」

歳50過ぎあたりと思われる店主は、につこりと笑ってコーヒー豆を挽き始めた。

「お客さん、何時までおられるつもりですか？」

私は何時まででもお付き合いますか？」

「もう11時ですよ。そろそろ帰りましょうかね」

水鳥は腕時計をみながらそう答えた。

今日プレゼントされた、真新しいシルバーの腕時計を。

「それにしても彼女、よく寝ていらっしやいますね」

「8時過ぎから飲み始めましたしね。それに今日は買い物で疲れたんでしょう」

私にもそんな時期がありましたねえ、と感慨深げに呟く店主。

「おぶつて帰るしかないですね」

「いいじゃないですか。星の光る夜に女性をおぶつて帰るなんて口マンチックですよ」

「からかわないでくださいよ。」

あと、もうすぐ雪も降り出すでしょうね」

水鳥がそういつた途端、おや？、と店主が窓を見た。

「驚きましたね。あなたは天気予報士なんですか？」

カフェオレを差し出しながら訪ねた店主に、いいえ、と苦笑しながら水鳥は答えた。

「ただの研究者ですよ」

翌日、朝のテレビニュースでは局地的な降雪の話題がとりあげられていた。

「局地的な降雪、ですか……。博士なにかしたんでしょう？」

「私から君へのプレゼントだと思ってくれたまえ。」

ホワイトクリスマスなんてロマンチックだろう？」

くつくつく、と笑いながら、コーヒーマーカーをいじる水鳥。

「やっぱり博士ですか……。さてはあの「ユキフラシ」を使ったんですね。」

しかも僕、昨日は他県で彼女を過ごしてましたからね。あまり意味ありませんでしたよ」

なんだ残念、と水鳥はどーでもよさそうに前田をスルーする。

ユキフラシとは、上空の雲にある作用を起こして雪を降らす機械である。

水鳥は庭にセットしているが、特に使い道もないので放置されて

いるものだ。

「ステルス機能つきだからってほっといたら大変なことになりますよ?」

「だろうな。私もそう思ったから今日中に倉庫にしまっておくつもりだ。手伝ってくれよ」

そんなあ、と落胆の嘆きが響く研究室に、眠たげな表情で白河がはいつてきた。

「ふああ……、私なんで仮眠室で寝てたんだろう……」

「昨日バーで眠ってたじゃないか」

「えっ、2人共昨日出かけてたんですか?」

君は知らなくてもいい、と水鳥はしっしつと前田を追い払う仕事を
する。

「そうだったっけ……」。

あと、枕元にこんなものがあつたんだけど

そういうと、白河はラッピングされた手のひらサイズの箱を机に
置いた。

「おや……? 私は知らないな。」

あけてみてはどうだい?」

白河は言われたとおりに箱を開けた。

すると、なかには金色に輝く腕時計がはいつていた。

「こ、これって……」

白河は腕時計を水鳥を交互に見比べる。

その心には驚きと疑問と、そして嬉しさが渦巻いていた。

「サンタクロースからのプレゼントだと私は思うぞ」

「博士、科学者がサンタクロースを信じるのはどうかと……」

「君は黙ってユキフラシでもかたづけしていたまえ」

まったくこういう仕事はおればっかり……、とぶつぶつ呟きながら
も従って片づけに行く前田。

「……私もサンタクロースはどうかと思うよ？」

「おいおい、白河君までそんなことを……。サンタクロースは存在すると」

「でも私……。そんなミツちゃん嫌いじゃないよ」

白河はそういうと、サンタクロースからのプレゼントを大事そうに抱え、部屋を飛び出していった。

「……普通にわたせばよかったのかもしれない」

ちよつとかっこつつけすぎたかもしれない、と今更反省する。

水鳥は電子タバコのスイッチをくわえ、空いた手でカフェオレを入れた。

白く曇った窓の向こうでは、小さな雪がヒラヒラと降り始めていた……。

(後書き)

恋愛成分を強くしたせい、パロディー成分が少なくなりました。少数の支持があるこの作品も2話目ですが、お正月の3話目は諸事情によりかけなくなりました……。まことに申し訳ありません。次にこのさくひんを手がけるのは鬼が豆から逃げるあの日でしょうかね……。

皆様の応援と暖かい感想やご指摘でなりたっている小説ですので、これからもどうかよろしくお願いします。

よいクリスマスを！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6504z/>

バカな科学を世界のために inクリスマス

2011年12月24日12時51分発行